

第 21 回大阪哲学同好会 2015 年 9 月 21 日 (月)

テーマ：「クオリアの意味を考える」

横山信幸

0. 練習問題 永井の絵日記を考えよう

「朝起きたら、赤いものが青く見え、青いものは赤く見える、というように色がすべて昨日と逆転して見えたとしよう。」(永井「私・今・そして神」)

- 世界に異変が起きた可能性
- 自分の眼がおかしくなった可能性
-
-

1. 心の哲学のタイプ

- デカルト実体二元論
 - (1) フィジカル・身体・物体 : 延長がある。物理的。間接的に分かる。
 - (2) メンタル・心 : 延長がない。非物理的。直接的に分かる。
 心身問題：物理的なものがなぜ非物理的なものと関係が持てるのか。
- 唯物論
 - (1) 行動主義：心理状態とは行動または傾向性に他ならない
傾向性「もし〇〇の状態になれば、△△の行動を取るだろう」と予測される状態。
 - (2) 同一説：心理状態は脳状態と同一
 - (3) 機能主義：行動主義と同一説のいいとこ取り
行動や傾向性だけでなく、その行動や傾向性の原因となる機能についても、心脳同一性の判断材料にすることができる。宇宙人の心も、深昏睡の患者の痛みも、その有無が言える。

2. クオリアの意味のさまざま

- Wikipedia の「クオリア」の意味：「簡単に言えば、クオリアとは「感じ」のことである。「イチゴのあの赤い感じ」、「空のあの青々とした感じ」、「二日酔いで頭がズキズキ痛むあの感じ」、「面白い映画を見ている時のワクワクするあの感じ」といった、主観的に体験される様々な質のことである。」
- 茂木健一郎のクオリア：

《クオリアの内観的定義＝クオリアは、私たちの感覚のもつ、シンボルでは表すことのできない、ある原始的な質感である。》

《クオリアの情報処理の側面からの定義＝クオリアは、脳の中で行われている情報処理の本質的な特性を表す概念である。》「脳とクオリア」

- 「哲学的な何か、あと科学とか」サイトの飲茶さんのクオリア観
たまに、「クオリアなんて、本当に存在するの?」「クオリアは、人間の想像の産物や概念で、実際には存在しないんじゃないの?」という意見を聞くことがあるが、そもそも、クオリアというのは、現に今、自分の身に起きているこれ(●)とか、これ(●)とかの現象に、「クオリア」という「名前をつけた」だけにすぎない。クオリアとは、靈魂のことも、脳(物質)を超えたココロのことも、「イシキに映る質感」という概念的な説明でもない。クオリアとは、すなわち、これ(●)のことである。これ(●)に「名前をつけた」だけのことである。
たとえ、これ(●)が、いわゆる物質として実在していなかったとしても、脳が作り出した幻影にすぎなかったとしても、現に今、「これ(●)が見えている」という現象は、疑いもなく存在している事実であり、その現象(事実)に、「クオリア」という名前をつけただけなのだ。
したがって、現に今、これ(●)をあなたが見てしまっているとしたら、もはや「クオリアがない」という言い逃れは決してできない。だって、「クオリアがない」という発言は、「これ(●)を見ているという事実がない」と言っているのと同じことだからだ。
ただ、それでも、どうしても、「クオリア～これ(●)～なんか存在しない」と主張する人がいたら……もしかしたら、その人は、哲学的ゾンビなのかもしれない……。

- ジョン・サール(1932-)のクオリア観
「あなたの劣化していく脳にシリコンがだんだん植え込まれていくにつれ、意識体験の領域は縮んでいくが、これが外的な振る舞いには影響を現さないことにあなたは気づく。あなたは自分の外的ふるまいに対するコントロールを失っていることに気づいてすっかり仰天する。…あなたは大声で叫びたくなる。『何も見えない。まったく見えなくなっている』しかし、完全にあなたのコントロールをはずれたあなたの声が『目の前に赤いものが見えます』と言っているのを耳にする。」(サール「ディスカバーマインド」)

3. チャーマーズのクオリア観 デイヴィドチャーマーズ(David John Chalmers, 1966-)

- サールに対して「しかし、この可能性は排除できそうである。このシステムはかなりきめ細かいところで元のシステムと同一である。単純にいつ「何も見えない」というような新たな信念や、大声で叫びだしたいというような新たな欲求や、あるいは驚きというような新たな認知状態が入り込む余地はまったくない。」(チャーマーズ「意識する心」)
- 機能的意識の側面 : 心理学的意識・「心」
非機能的意識の側面 : 現象的意識・意識体験・クオリア・「意識」
- 哲学ゾンビ：「ゾンビ、つまり、物理的に私と同一でありながら、まるっきり意識体験を欠いている何ものか。世界的レベルではゾンビ世界が論理的に可能であると考えることができる。われわれの世界と物理的に同一でありながら意識体験というものがまったく存在しない世界である。」(同 p128)
「私の双子の一方のゾンビを考える。この生き物は分子の一粒まで私と同一でありながら、彼には意識体験が完全に欠けている。・・・機能のどれを見ても本物の意識体験は何一つ伴わないはずで、まさにそこにポイントがある。現象的な感じというものはまったく無い。ゾンビであるということだというものが何も無いのだ。」(同 p129)
「[意識が]説明に絡まないことから出てくるいちばんの難問は、われわれ自身の意識体験をわれわれが知っていることである。明らかにわれわれは自分に意識体験があると判断しているだけで

ない。意識体験があると知っているのだ。」(同 p244)

- ぼやけていくクオリア：われわれは私のニューロンをある一定数シリコンチップで置き換えるのを想像できる。最初はただ一つのニューロンだけで置き換わる。置き換わるのはシリコンチップで、ニューロンと精確に同じ局所機能を遂行する。p315
- 反転したクオリア：われわれはまず、おそらく私が眠っている間に網膜から脳の中心領域に至る配線を変えることによって、ある主体の内部でクオリアが反転されうることに着目する。目が覚めると、私は突然空は赤く見え、草は黄色に見え、等々と断言するようになり、私のクオリアが反転したと信ずべき理由はいくらでも出てくる。次に誕生の時から脳の配線がこのように変えられている人物が可能であることを持ち出す。そういう人は、典型的な行動様式という点では系統的に反転したクオリアをもつかもしいないが、当然空を青いと言うように、草を緑色と言うように等々学習しているから、この反転は決して彼らの行動に現れてこない。ところが、機能構成が固定されていながら反転したクオリアが可能であることは、これでは立証されない。それを理解するには、悪魔が私の配線をいじるときに、私の機能構成に重大な変更を加えてしまったというところに目をつけるだけでいい。p327
- 跳ね踊るクオリア：私と私の同型体の間に中間的な事例の系列を作り上げる。…赤と青のシステムの間には、そのそれぞれと内的組成はせいぜい10%しか違わないけれども、著しく異なる経験をする二つのシステムがなければならない。この二つのシステムを私とビルということにしよう。私が赤い経験をするところで、ビルはかすかに異なる経験をする。ビルは青を見ると考えたほうがいいのかもしいない。…この二つのシステムは、脳のある小さな領域が私の場合はニューロンであるのに対し、ビルの場合はシリコンチップになっているという点でも異なる。この、神経回路がシリコン回路に置き換わっているところが唯一、ビルと私の物理的違いである。この思考実験で決定的になるステップは、ちょうどビルのと同じようなシリコン回路を持ってきて、それを私の頭にバックアップ回路として組み込むところにある。この回路は、すでに私の頭にある回路と機能的に同型になるだろう。この回路に変換器とイフェクターを取り付け、私の脳のそれ以外の部分と相互作用できるようにするが、直接それには接続しない。そのかわりスイッチを組み込んで、神経回路とシリコン回路を直接切り換えられるようにする。どちらの回路が脳のそれ以外の場所に働きかけるか、このスイッチで接続器のポイントをコントロールしている。…スイッチを入れるとその直後から、それまで神経回路が行っていた処理を今度はシリコン回路が行うようになる。システム内でのコントロールの流れは切り替わっている。ところが、私の機能構成はスイッチを入れなかったらそうなっていたらというのと、まったく同じである。…スイッチを入れると、私の経験に何が起きるだろうか。回路を組み込む前、私は赤を経験していた。組み込みが終わってもスイッチが入らないうちは、いずれにしろ処理に絡んでこない回路が一つ加わったという違いしかないのだから、私はまだ赤を経験している。ところがスイッチが入った後では、私は多かれ少なかれビルと同じシステムである。…ビルは青の経験を楽しんでいた。そういう仮定である。ということは、スイッチが入った後は、私も青の経験をすることになる。だとすれば、私の経験が<目の前で>変化するということになる。今や私は、以前には赤を経験したところで青を経験するだろう。われわれは、赤の経験と青の経験が私の目の前で<跳ね踊る>ように、スイッチを何回となく入れたり切ったりするところを想像することさえできる。…ここでは何か非常に奇妙なことが起こっている。私の経験は赤から青に切り替わるが、私はいかなる変化にも気づかない。スイッチを何回となくパチパチ切り換えるに伴い私のクオリアが行ったり来たり跳ね踊ってもなお、私は何も異変に気付かず、ただ為すべきことをしているだけであろう。…私の行動性向に、特別違うところはない。突然、「うむ！何か妙なことが起き

ている！」と言いたくなるようなことはない。突然びっくりしたり、感嘆の声を上げたり、注意を逸らしたりといったことはまったく入り込んでこない。P331

4. 外在主義によるクオリア論とゾンビ批判

- 外在論者が水を水的性質によって定義する。
 - ① 「水を水的性質によって定義する」ということは、水的性質をもつ物質はすべて同じ種類であり、それをもたない物質は異なる種類だと考えられるという想定のもとでなされる。
 - ② つまり、「水を水的性質によって定義する」ということは、周囲の物質の中から水的性質をもつものを「水サンプル」として取り出し、「その水サンプルと同種の物質を水だとする」として定義される、ということだとするのだ。
 - ③ それゆえ、双子地球に水的性質をもつ物質があったとして、その化学式が H2O ではなく XYZ であるような物質だった場合、それは水的性質を持っていても水ではないことになる。われわれは、現実の世界において言葉を使うほかはないのだから、その現実の世界によって、語の意味は決定づけられてしまう。だから、現実の世界において水が H2O であるのなら、われわれの「水」は本質的に H2O になってしまう
- 外在論者のクオリア
 1. 「A を B として定義する」とは、現実世界のなかに B の性質をもったものが一つの同じ種として存在するというを前提とすることであり、その前提の上で B の性質をもったものを標準的なサンプルとして取り出したときにそのサンプルと合致するものを、A という名を冠する集合の一要素とするということである。
 2. 「クオリア」を「現象的な意識の質」と定義するというは、現実世界の中に「現象的な意識の質」なるものが一つの同じ種として存在することを前提として、現実の「現象的な意識の質」の標準サンプルと合致するものを「クオリア」と呼ぶことにする、ということである。
 3. 現実の標準サンプルに合致するような存在の集合が「クオリア」なのだから、「クオリア」の集合を調べてみると「現象的意識に現れるもの」という性質以外に機能的な性質など本質的な性質が存在する可能性は否定できない。
 4. 現実世界において定義した「クオリア」という言葉は現実世界のクオリアが標準サンプルになるので現実のクオリアは必ず物的作用が関連してしまう可能性から逃れられない。だから、それがあつたりなかったりしても物的にはまったく同一であるような可能世界を考えようとする場合には別の「クオリア」を用意しなければならない。つまり、現実世界で定義した「クオリア」について言えば、ゾンビは語の意義的にあり得ない。
- 5. クオリアは物的存在に論理的付随するか
 - 「論理的付随性について、一般に特性 B が特性 A に論理的に付随するとき、事実 A が事実 B を内含している、ということが出来る。ある事実がもう一つの事実を欠いては論理的に成り立ちえないとき、ある事実がもう一つの事実を内含しているというのである。」(チャーマーズ「意識する心」邦訳 p61)
 - 外在主義がクオリアの物的付随性しない可能性がないとするわけ
 1. 「ことば」は一つの同種のものの集合を外延として確定する。

2. この外延の集合は共通した本質をもつ。仮に、それまで見えていなかった本質があったとしても、その集合が隠れた本質をもっていることは可能である。
3. 外延の集合は共通した物理的本質を持ち得る。
4. 外延の集合が共通した性質をもつならば、それは本質的な性質である。
5. 逆に、そのような本質的な性質をもたない対象の集合は、「ことば」が指示する対象の集合ではないことになる。
6. ゆえに、「クオリア」ということばが一つの同種の対象を指示するのであれば、それは物理的本質をもつ可能性は除外されない。
7. だから、クオリアは物的状態に付随しないとは言えない。
8. そして、「ことば」の意味はその外延をさす。「ことば」の意味は発話者の頭の外の実在世界に存在するので、この立場を外在主義という。

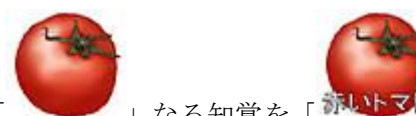
- チャーマーズがクオリアが論理的に付随しないとするわけ
一次内包に対する思惟可能 1 と二次内包に対する思惟可能 2
 - ・ 思惟可能性 1 とは、「水とは水的物質だ」という一次内包に対しての可能性なのだから、水が水的性質をもたないような世界にかんする思惟可能性 1 はあり得ないが、水が H₂O でないような世界にかんする思惟可能性 1 はあり得る。
 - ・ 思惟可能性 2 とは「水とは H₂O だ」という二次内包に対しての可能性なのだから、水が水的性質をもたないような世界にかんする思惟可能性 2 はあり得るが、水が H₂O でないような世界にかんする思惟可能性 2 はあり得ない。
- チャーマーズが意識にかんして内在主義をとるわけ
 1. 実在するものの名の意味は物理的外延として捉え、物的存在に論理的に付随すると考えることで、物的な存在の意味を考察することができるようになる。
 2. だから、あらゆる実在するもののほとんどは、物的存在に論理的に付随すると考えるべきである。
 3. しかし、意識に関しては、物的存在に論理的に付随すると考えてしまうと、意識の物理的ではないような現象的側面について考察することができなくなってしまふ。
 4. だから、現象的意識やクオリアは物的存在に論理的に付随しないと考えねばならず、それを示すことばの意味は内包して捉えねばならない。
- チャーマーズら内在主義者は、一つの言葉がもし 1 次内包と 2 次内包を同時に持っていたなら、それぞれが同じ一つの対象を指示するとは限らないとし、それゆえ、クオリアの物理的本質を示す 2 次内包を誰かが提示したとしても、クオリアの 1 次内包と 2 次内包が指示するものが異なってしまう可能性は消えるわけではなく、ゾンビの論理的な可能性も消えないと主張する。
- これに対し、外在論者は、言葉の働きの大原則として一つの言葉の外延を一つに定めるべきだとする。だから、1 次内包と 2 次内包が仮に同じ対象を指示できないという状況が生じるのであれば、そのときは 1 次内包の方が間違いだったとせねばならないと考える。そのため、クオリアの物理的本質を示す 2 次内包が発見されたなら、2 次内包によって指示されたクオリアがその唯一の外延なのであり、1 次内包が異なるものを示すようなことがもしあれば、そのときは 1 次内包が間違っていたのである。だから、論理的にゾンビはありえないことになる。



- 語の意味の本質とは、内在主義にとっては発明されるべきものであるのに対し、外在主義にとっては発見されるべきものだと言える。

6. 表象主義の志向的クオリア：ギルバート・ハーマン(1938-)や信原幸弘(1954-)など

- 「意識的経験に備わるクオリアは、その経験の志向的特徴である。」(信原幸弘「意識の哲学」p102)
- 「クオリアにかんする志向説：クオリアとは意識経験そのものの性質ではなく、意識経験の志向的对象の性質である」(鈴木貴之「ぼくらが原子の集まりなら、なぜ痛みや悲しみを感じるのだろうか」p64)
- 「表象理論とは、クオリアとは志向性を持った表象であると解釈した上で、心とは表象の処理装置であると考えた立場である。」(心の哲学 wiki)

○表象：像によって何かを表すこと。 ○知覚：まだ意味を生じさせていない段階の世界データそのもの



「」なる知覚を「」という表象として捉えることによって、「赤いトマトそのもの」を表している

- 表象に関する二つの特賞
 - 「表象の内在的特徴」：表象それ自体に備わる特徴
 - 「志向的特徴」：表象によって表されるものに備わる特徴
 - クオリアは意識への現れであり、意識に現れるというその一点がクオリアの本質でなければならないものだ。だから、知覚に現れる「現れ」そのものの特徴、つまり「内在的特徴」こそが、クオリアの特徴のはずである。しかし、「志向的クオリア」のアイデアはそこを敢えて、クオリアの特徴を志向的特徴として捉える
- 現れの呪縛・クオリアを例化された性質でなければならないとする考えにとらわれること
 - 「クオリアが例化された性質だとすれば、クオリアは意識的な経験が生じるたびごとに例化されることになるから、太郎の意識に現れる緑のクオリアは当然、花子の意識に現れる緑のクオリアと数的に異なることになる。したがってそれらが数的に同じだとすれば、それらは例化された緑ではありえない。クオリアの共有を認めれば、クオリアを例化された性質とする見方も少しは和らぐように思われる。クオリアは意識への現れである以上、例化された性質でなければならないという現れの呪縛は確かに根強い。しかし、クオリアが複数の意識に共通して現れうることを考えれば、たとえクオリアが意識への現れであるとしてもクオリアはやはり経験の志向的特徴だとみなすべきであろうと思われるのである。」(信原「意識の哲学」)
- 表象主義への疑問 (横山の考え)：もともと「クオリア」という語でもって語りたかったのは、「そのもの自体が何であるかという問いへの答え」だったはずだ。しかし、表象主義は、そのクオリアを語り得るものにするために、本来他のものとの同一性などが問えないはずの、

その問いの答えを求めるといふ、つまり、複数の時点や複数の主体における同一性があるものとするといふ、矛盾を犯さねばならない状況に陥ってしまっているのではないか。



今の現象画面

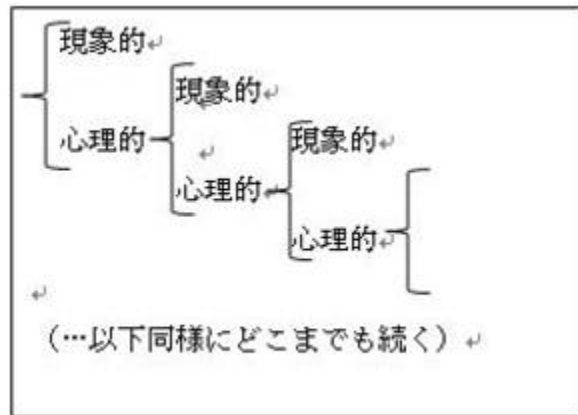


昨日の現象画面



今の現象と昨日の記憶を比較するための画面。

7. 永井の、独在論と累進構造によるクオリア論 永井均(1951-)



● 0次内包：「酸っぱさの例でいえば、梅干しや夏みかんを食べたときに酸っぱそうな顔をするとき感じているとされるものを、酸っぱさの「第1次内包」と呼びます。第1の逆襲をへて、何も酸っぱいものを食べていなくても、なぜだか酸っぱく感じられることが可能になった段階の酸っぱさの感覚そのものを、酸っぱさの「第0次内包」と呼びます」(永井「なぜ意識は実在しないのか」)

● 「言語を介したこの伝達によって、現象的なものはすでに現象的でなくなって心理的に、

つまり心理的な概念の内部での現象的なものに、変質してしまっているのではないのでしょうか。…つまり、この対比には、という構造をもった、対比の累進が避けがたく組み込まれているのです。そして、このことが避けがたく組み込まれているということこそが、この対比の本質なのだと思うのです。対比をどのレベルで理解すべきかが決定できないので、不安定な構造を内部に抱え込んでいるからです。…もし「感じる」に現象的と心理的の二つの意味がありうるなら、「現象的」それ自体にも、その二つの意味がありうるのは、むしろ当然。それなら、「体験」や「意識」や「クオリア」など、じつはみんな同じはずではないでしょうか。」(「なぜ意識は実在しないのか」)

● 「本来語りえないのではなく「累進構造」によって語りうるわけですし、「矛盾」は、マクタガートが時間について発見した意味でのそれは世界の本質構造そのものだと言っているわけですし、「言語論的には無いはずのものでも有るとする」のではなく、「実は無い」ものを言語が捏造してしまった世界にわれわれは住んでいる(そしてそこから見れば逆に語れるが)わけです」(mixiで僕の質問に対して永井から頂いた回答。)

● 0次内包はチャーメーズのクオリアではない

● 当初の0次内包は機能主義でも還元できる

● 入不二による「無内包」「マイナス内包」の整理 入不二 基義(1958-)

無内包は0次内包より「いっそう自立的な水準」での0次内包だとし、また、「独在性の<私>・最上段の「これ」であるという。「真に第0次内包…」を「私/他者」という対立軸で読むのではなく、「感覚の場面/独在性の場面」という私の内の対立軸(認識/存在という軸である)のもとで読む」(「<私>の哲学を哲学する」入不二の部)

「真に第0次内包であるためには、それらすべてに「この」をつけなければなりません、その「この」は外部から「その」として指し返されることのない「この」です。つまり、真に第0次的な表現などありえません。それは言葉よりも手前にあるので、そもそも言葉で語られることと、そりが合わないのです。」(永井「なぜ意識は実在しないのか」)

この、言葉の手前にあって語られ得ない、独在性の観点で見たときの(もはや語の意味ではないような)語の意味を「真の0次内包」と言い、「無内包」と分類する。

● つまり、「0次内包」は、「他と比較して語り得て、ブラックボックス機能主義に還元できるような、当初の意味での0次内包」と、「語り得ないチャーメーズのクオリアとしての、マイナス内包」と、「独在性の視点で、言語の手前で言語を支える、無内包」との混合物だったと言える。

○ 無内包を語り得るようにできるのか。(横山の考え)

・ 永井とチャーメーズの問題の捉え方の共通点

「われわれはなぜ同様な議論によって、もし意識体験が論理的に付随し損なったら、自分自身の意識についてすら知ることができなくなる、と結論するよう迫られないのか。その答え。それは、意識体験はわれわれが認識する宇宙のまさに中心に位置するからである。」(チャーメーズ「意識する心」)

・ 永井の言う<私>も無内包も、チャーメーズの言う「宇宙の中心」も、デカルトの「コギト」も、ウィトゲンシュタインの「私は私の世界」も、世界を開闢し世界の中心で世界を認識する主体だという意味でよく似たもの。

・ 「世界あり」という命題が本当に命題であるためには、それが真である可能世界と偽である可能世界があることを前提とされていて、その二者のうちの真である可能世界が現実である

と理解するようなものでなければならない。そのシステムが用意されることによって、はじめてその命題は意味を持てるようになる

- ・ 「無内包のレベルの『ある』」というのは、誰でもが「私」であると主張できるような次元の「私」が見た「ある」ではなく、現実のこの世界を開闢している唯一の主体としての〈私〉の視点でもって見た「ある」であり、〈私〉もろともに世界が開闢している「この」事実のことである。一方、「0次内包の『ある』」というのは、僕以外の多数の「私」をも「私」として認め、その「私」が世界を観察し発見する主体になっているという視点において、その視点で観察されている世界が存在することである。
- ・ 「世界あり」という命題が本当に意味を持っているのは、その0次内包の視点での、誰でもが世界の開闢者であり得るという次元での「世界あり」だ、という話に落とし込まれてしまわざるを得ない。デカルトが本当に言いたかったはずの絶対確実な「コギト」は言葉では語れない。永井が言おうとしている〈私〉は原理的に言語化できない
- 永井の累進構造説：「無内包の主体」の存在をそのまま捕まえることはできない。できないが、無内包の主体に逃げられたときに無内包の主体の身代わりとして捉えられた「0次内包の主体」を、思考の踏み台にして、そこから逃がしてしまった何かを「無内包の主体」として展望する。そして、さらにその展望した「無内包の主体」を捉えようとする。そしてまた身代わりに捉えた「0次内包の主体」を踏み台にして、逃してしまった「無内包の主体」を展望する。そのくりかえしをすることで、「無内包の主体」を語り得たことにしてしまう

8. 「メアリーの部屋」(或いは「知識論法」) フランク・ジャクソン (1943~)

メアリーは、何らかの理由で白黒のテレビモニターのみを通じて、白黒部屋から世界を調査することを余儀なくされた、輝かしい科学者である。彼女は視覚と神経生理学の専門家で、完熟トマトや空を見たときについて、また「赤」「青」などのような用語を用いるときに何が起きるのかについて、物理的に完全に理解し説明できる。彼女はたとえば、空からの光の波長が網膜を刺激し、前視覚、中枢神経系、肺、声帯での空気の収縮へと通じて、「空が青い」という文を発する過程を解明する。(これらすべての物理情報は白黒テレビのみから得られているということが原則である。)そして、メアリーが白黒の部屋から解放されたり、カラーテレビが与えられたりしたときに何が起きるだろうか。彼女は何かを学ばないだろうか。彼女が、われわれの視覚体験について何かを学ぶことは明らかだ。彼女の知識が不完全だったという結論は避けられない。しかし、彼女はすべての物理情報を持っていたとしていたはずだ。それゆえ、物理主義は偽である。(「Epiphenomenal Qualia 随伴現象性クオリア」かなり意識)

9. クオリア批判 ダニエル・デネット(1942-)

● メアリーの部屋批判

「かくしてある日、メアリーを閉じ込めていた監視人たちは、いよいよメアリーが色を見る日が来たと判断した。ちょっとしたおふざけで、彼らはメアリーの人生最初の色彩体験として提示するものに、明るい青色のバナナを用意した。メアリーはそれを一瞥すると「あら、私を騙そうとしたでしょ。バナナは黄色なのに、これは青い色をしている」と言った。監視人たちは驚いた。なぜメアリーにそんなことがわかるのか。彼女の答えは「簡単なこと。私が、色視覚の物理的な因果に関して知り得ることはすべて、絶対的にすべてを知っているということを忘れないでください。だからもちろん、皆さんがバナナを持ってくる前に、黄色い対象ないし青い対象がどのような物理的印象を私の神経系に対してもたらすかということを見事なまで細部にわたって正確に書き記していました。したがって私は、私がどのような思考内容を有することになるかを事前に知っていたわけです。」(「解明される意識」)

…私が述べたことは、メアリーは、実際に色を見る経験をする前に、色彩科学の膨大な知識を使って、赤いもの、黄色いもの、青いものを見るということはそもそもどうということなのかということを理解していたということであった。…これは思考実験ですよ。つまり、あらゆる種類のことをでっちあげなければなりません。——伝統——…一度も色を見たことが無かったら、色がどのように見えるかということが推論できません。——デネット——それは民間定理です。(「スウィート・ドリームズ」)

- メアリーの得た知識がオリアに関する知識だと主張するためには、メアリーの持っていた物理知識にはクオリア以外のすべてが含まれるとする前提が必要である。つまり「クオリアの欠けた経験的知識」を持っていたことにせねばならない。しかし、そうするとメアリーは赤体験に驚かないことになってしまう。
- カルテジアン劇場(デカルト劇場)：伝統的な意識のモデル(意識のホムンクルス・モデル)を批判するために、アメリカの哲学者・認知科学者のダニエル・デネットが提唱した概念。人間の脳の中には小人(ホムンクルス)が住んでいる劇場があり、そのスクリーン上に経験された感覚的データが上映されるという発想